

きよぶるまゝ

NO.54 月刊

昭和七年十二月一日 発行
吉備 観志 陽 会
（非売品）
宇垣方

○ 校倉重昌 通稱宇右衛門 從五位下 内膳正

天正十六年駿河國に生る。母は常生館前守藤原永勝の女、三河國額田郡深溝にて一万八千石を領した。寛永十四年島原に蜂起したキリシタン宗徒の乱を鎮圧のため總帥として出陣し翌十五年正月朔日不幸に於て敵陣にあたりて戦死した。時に五十一歳であつた。三河國長岡寺に葬る。

重昌の討死した長崎長南高来郡南有馬町の古城の場所には記念の松樹のもとに石碑がある。これは延宝九年辛酉年戸林学頭信篤の碑文にして、寛政十年十一月に建てられたものである。この後述は寛永十四年（一六三七）徳川三代將軍家老の代に起つたキリシタン教の乱である。当時國政によつて禁教になつてゐたキリシタン宗（當時の時福）と島原地方の苛酷な租税に苦しむ農民達と、徳川幕府に對する不平の浪人が結合して巻き起した事件である。元來キリスト教は天文十二年（一五四二）にポルトガル船が種子島に漂着してから初めて西欧の船舶が日本への航路を開き、その後六年に至りて天文十八年に、イエズス会の宣教師であつたフランシスコ・ザビエルが渡日した。その頃國內は戦亂のただなみで、まだ十代であつた織田信長は毎日愚行をしまつた父の信秀や家臣たちを絶望させてゐた頃であつた。ザビエルはイエズスヤ人（マカス・マイン）にして最初新島に上陸し、平戸、博多、山口から堺、京都などに行脚してキリスト教を傳道した。（イエズスヤはヨーロッパ諸國中最早中興集権を行つた絶対主義専制國家で十六世紀頃文明國として最高潮に達した。イギリスと交戦し無敵艦隊を全滅（一五八八）して獨身に覇を（一八一七）にフランスのナポレオンの政變を受け倒れた。一八一七）に自由主義の革命が起り共和國が成立した。戰國の乱世に於いて永禄十二年（一五六九）には信長の庇護によつて全國に布教を許されたので各地にセミナリヨ（修業所）コレジヨ（学校）ノビシヤド（練書所）などを設けてヨ

ロッパ式宗教教育を行つた。當時來朝してゐたケエリヨ神父はイエズス會議長に宛た書面に「セミナリヨに收容してゐる日本少年たちはラテン語に上達し才能はヨーロッパの少年たちにならなからぬ」として言つてゐる。安土・桃山時代にすでに日本少年が西洋文化の洗礼を受けてゐたことは想像もつかないことである。信長は同宗のために京都に南無寺を建てて擁護したことは周知の通りである。これは一面すでに佛教徒の専横をきらひ、その勢力を抑えるのが目的でもあつた。元應三年（一三二一）には比叡山を包圍攻撃して僧徒千數百人を虐殺した程である。天正九年には益々信者があつたものは高山右近、大友義鎮、小西行長、黒田孝高などであるが、島原の領主有馬晴信、天草の天草種元等とはむしろ熱心なキリストの信奉者である。従つて強制的に領内に布教したので急速度にはいさゝか天草の秀吉が天下を握るようになった。天正十五年（一五八七）にキリスト教の領土的野心に疑念を抱き、かつ佛僧の反對も手傳つて邪宗門としてこの宗派の布教を厳しく禁じた。これは漸く棄元はじめたが、禁令後の天正十七年に熱心な小西行長が肥後の國を支配してゐたこの地方には却つて熾んになつてきた。（小西行長はもと泉州瀧の町人の子で備前岡山下の町、ソマの天満屋前通りに假寓し宇喜多氏の御用を勤めてゐた關係上、しばしば使者として大阪へのほり、豊臣家に入出入りし、その才能を認められ、武士に取り立てられ提督に進んだ。文禄慶長西度の朝鮮の役には第一軍の部將として出陣した。関ヶ原の役には運使するく西軍に加はるた敗れ捕えられて石田三成、宇國守忠瓊等と共に斬首の極刑に處せられた。キリスト教の傳來で西欧文化の成果は実に著しく、當時の生活状態に一大変革をきたした。徳川家康も亦關府以來一層これに彈圧を加へ、取締をきびしくした。三代家老は鎖國主義を勵行し、中國、朝鮮、オランダの三ヶ國を除いた諸外國との交通を断ち一切の貿易を許さず、殊に同宗を嫌惡し信仰するものは容赦なく極刑に

に辱した。当時死刑にあらたものは三十五方人の多きに及んだという。

(御津郡馬屋下村善質の出身で高人であつた市川善左衛門といふ人は京都に於て同族門に入信し出家して傳教師になつた。ヤコブ書在門といふ当時傳教師といふは外國人多く日本人としては稀な存在であつた。この人は慶長元年(一五九六)に切支丹宗禁制の様性となつて捕らわれ、長崎に護送され、長崎に於て有為な二十六聖人の内に救はられた一人である。これが日本で最初の殉教者である。ローマ法王は慶長元年(一六〇二)にこの人々に對して聖人の稱号を與へて二十六聖人と呼んだのである。この日本文人は千人、十二歳(尾張の人)十三歳(長崎の人)十歳と十六歳(伊勢の人)といふ四の少年が含まれてゐる。其後日本文で聖人に列せられた殉教者はなし)。信仰の力ほど強いものはなく、如何なる刑罰を加へられてもその跡は断ち切れるものではなく、寧ろ宗敵と闘つて死するも希望である。と堅い決心を持つてゐた。殊にこの島原地方は山行長の歿後、松倉長門守重政文總主となつたが、この重政は國政に従つて大いにキリシタン嫌の大名で、回宗に對する圧政は甚しく信仰者を捕へて雲仙嶽の熱湯に沸め、或は竹銘によつて断首するなど苛酷極まる刑罰を行つた。ことゝあるうにこの島原は永年農作物の出来が悪く農民は苦難してゐるのに租税の重いことであつた。重政が海北して寛永七年(一六三〇)に、その子重治が家督を継ぐや、益誅求は以て米穀類の外、炒錢、意錢、蔬菜錢、埋葬に穴錢、出産に頭錢といつた特殊の税金を課せられた。未納者は容赦なく拉致して手足を縛り身体を籠にて巻き、火を付けて焼く、所謂(ミノ踊)の刑を行つた。寛永十四年には口津の百姓共三右衛門といふものの嫁が、妊娠中であるのに裸体になされて日洲に引き出され、役人が冷水を頭から注いで水攻めにして虐殺したことが京因になつて、農民は激昂し、餓死するが、武器をとつて抵抗するが、最後の手段に迫られた。時にこの地方には關ヶ原の戦や、大坂の陣が敗れた豊臣家の殘黨で徳川氏に怨恨を抱いてゐる浪人組が多く集ひ、庄屋數名をその女して、農民軍を組織した。山行長の遺臣で祐筆を勤めた益田甚兵衛好次

といふ浪人が、一子の四郎時貞を連れ、大野の越野浦に隠棲してゐたが、これを説いて四郎時貞を首領に祭りあげて叛旗を翻したのである。集まつたものは同じ行長の四臣大野松右衛門、千束善右衛門、大江源右衛門、山善右衛門、森宗意などの浪人である。この四郎時貞は却てから伶俐敏捷、長崎に遊學して神童と呼ばれた。是れに是少年であつたので「天使」といふキリシタンの生れかわりとか、或は豊臣秀吉の落胤などといふ傳へ、農民たちの因結精神を堅めたのである。

寛永十四年の十月廿五日、ついに大蓋をきり島原半島の南岸を東進して翌廿六日には島原町へ侵入した。然し阻止せられ、ここに全半島は戦亂の巻と化した。一方十一月六日には天草島の下島にも蜂起した。農民軍は西海岸に近い富岡城を急襲して城代三宅藤兵衛を血祭りにした。氣勢はあつたが、一進一退であつた。(富岡城跡は富岡にあり、ここに同族の殉教者三千余の首級を埋めた千人塚がある。町の西に面した海岸の小丘に有名な頼山陽の詠める「泊天草洋」の詩碑がある。

雲耶山耶吳耶哉 水天穿鼻青一髮 萬里泊舟天草洋 煙橫蓬窓日漸没 大白当眩明如月 瞥見大魚躍波間。

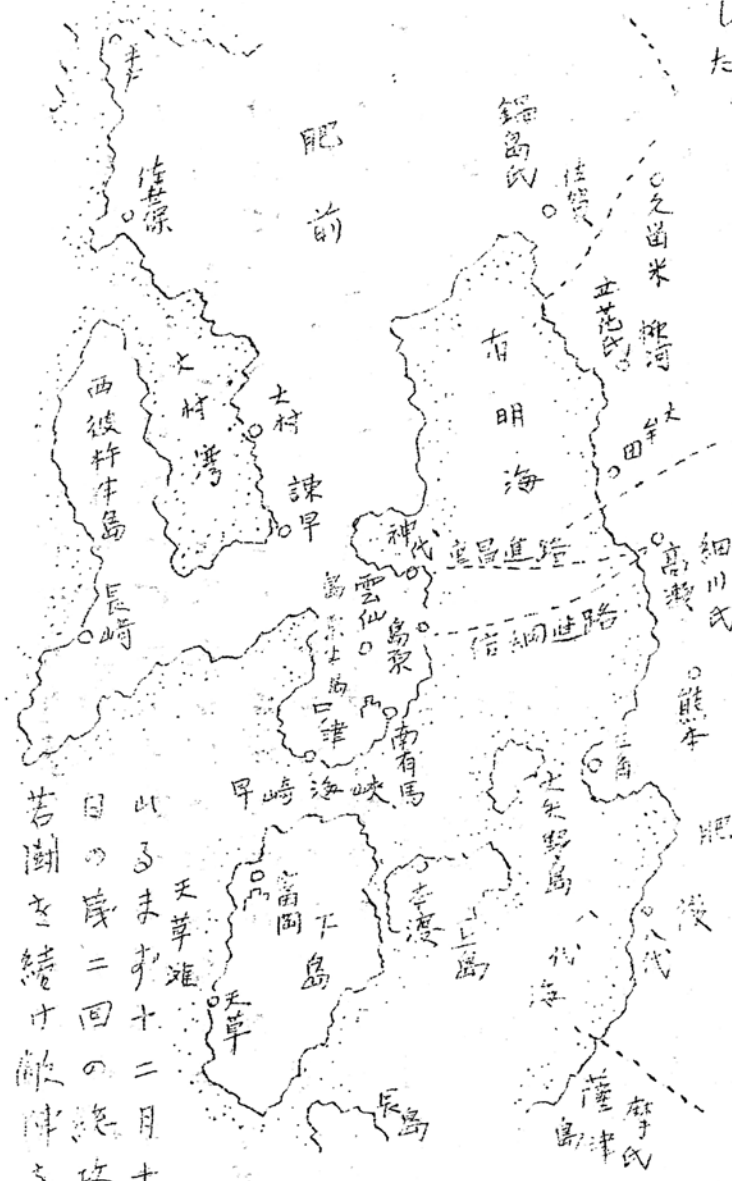
是れは農民軍は上津浦の平嘗をあとに大挙して舟で早崎海峡を渡つて島原勢に合流した。終勢は一万二千余、進んで原城へ立籠つた。(この城は一つに日暮

城といふ島原半島の南岸に在り、北東南の三方は有明海に瀕み、西北は深い濠池を繞らした要害な城である。この城は歴代の戦後戦國と名の蜂起し始めた明暦五年(一四九六)に有馬重純が築城したのが創始になつてゐる。城廓は半丸三丸三丸にわかれ、城壁は高く有明海を在り、当時廿六万石を領したといはれる文字にて武蔵を近隣に採つたのである。豊純は六代後ちの有馬直純に三子、慶長十九年徳川幕府の命で日向國延岡に移封し、此に替つて元和二年(一六二六)に大和國五條から松倉重政が轉封した。トカレ松倉氏は白河原に赤松城を新しく築城するに當り、城廓の石材を運ぶたので、百三十年間有馬氏の在家筆を誇つた原城も、フに廢墟に化したのである。記録によると城門七ツ、柵櫓は廿三あったという)。農民軍が原城に立籠つたことは、各自がその利害關係を異にし、宗徒は九州を平定して幕府に迫ら

んとし、農民はこの地方の善政を欲する程度であるから進んで野戦を行ふことは固結上不利を招く結果になることを悟つたからである。一方、松倉長門守重昌は武裝蜂起のただならぬことに驚き、早馬を上り先に十一月九日廟議によつて翌年(寛永十五年)フイリッピン侵攻の七軍を出兵する計出であつたから、この突発事件を早く鎮定させようとして、松倉重昌と上使とし、石谷貞清を目付使として九州に派遣し、細川頼元等の諸藩の連合征討軍約十二万四千人を編成して十二月十日敵の據点、京城に包圍攻撃を始めしたのである。

京城の幸丸には十字架が高くたてられ城内到る所に十字架の聖像模範林立した。

○ 島原の乱要圖



此のまゝ十二月十日の第一回、回世の敵撃は十字架より天草に對し、一歩も前進せず、天草の諸將の諫止を顧みず、強引に海軍最後の総攻撃を加えたが、依然として戦果はあからず焦意のあまり、陣頭に書き進めて督勵したが、四千余人の死傷を出して、抜くことが出来ず、重昌の被破は、槍は折れ、奮迅の戦もその甲斐が無く、敵の放った弾丸に当り、悲壮な最期を遂げたのである。時に年齒五十一歳の遺洋はその臣事羽澤兵衛、北川又左衛門等が深手に情まわ放出し、城外の江東寺へ收容して、ここで荼毘にふして、後ち本國三河國の中島村長田寺に改葬したのである。重昌の子、主水依重、矩は僅かに廿一歳で父に従ひ従軍して、たが、父の死を聞き、憤怒し、甲合戦をせんものと部下數十名を率いて陣頭に進んだが、石谷十藏から無謀を諫められて引き返されたという。

かつた。幕府は遂に日時を費し戦況の好轉せざることを憂慮し、歳二月に、老中松平信綱を正使に任命して島原へ増援軍を發した。信綱が来た時、島原の翌年の正月元旦の朝まだき、重昌は諸將の諫止を顧みず、強引に海軍最後の総攻撃を加えたが、依然として戦果はあからず焦意のあまり、陣頭に書き進めて督勵したが、四千余人の死傷を出して、抜くことが出来ず、重昌の被破は、槍は折れ、奮迅の戦もその甲斐が無く、敵の放った弾丸に当り、悲壮な最期を遂げたのである。時に年齒五十一歳の遺洋はその臣事羽澤兵衛、北川又左衛門等が深手に情まわ放出し、城外の江東寺へ收容して、ここで荼毘にふして、後ち本國三河國の中島村長田寺に改葬したのである。重昌の子、主水依重、矩は僅かに廿一歳で父に従ひ従軍して、たが、父の死を聞き、憤怒し、甲合戦をせんものと部下數十名を率いて陣頭に進んだが、石谷十藏から無謀を諫められて引き返されたという。

城中から重昌を狙撃したのは、山西行長の遺臣駒本振八兵衛の幕下、下針金作といふもので、落城の後、捕られ、島原で竹鋸で斬首の刑に付された。城中では重昌の戦死が傳り、重昌のなかに盛んな歎聲がわき起り、農民たちの意氣は、よ／＼軒昂であつた。

松平信綱の正使が戰場に着いたのが一月三日、重昌が討死して、三日月である。信綱は兵員の損耗を考慮し、主として大砲の威力を用いて、中射撃を開始し、更に平戸にあるスラング商館に銃撃し、蘭船をライプ号の応援を援つて海上に打ち出さす。城中へ艦砲射撃の方法をとつたが、敵味方から國辱と非難されたので、さすみに智慧伊豆といはれた信綱もやむなく中止した。二月十日には朝早くから打出す城牆の大太鼓が響きわたり、これに和して、寄せ衆もついでに、

寄せ衆 鉄砲の玉の あらうんたざりは
どんどと鳴るは 寄せ衆の大筒 ならうとしらしよ

こちの小筒で、ありがたの利生や、(神佛利益)
伴天連さまのあざけで、寄せ衆の頭を、おんと切支丹
の勇まし、歌聲が、陣中に聞えてくる。信綱は北線を裁いた敵の抵抗に
いたずらに力攻めは却つて味方の損害を多くするのみで、存んの益のな
いことを悟り兵糧攻めの持久策を用ひ、城外なるの連絡を嚴重に監視し
て、間はずに偵察隊を組織して監視せしめた。

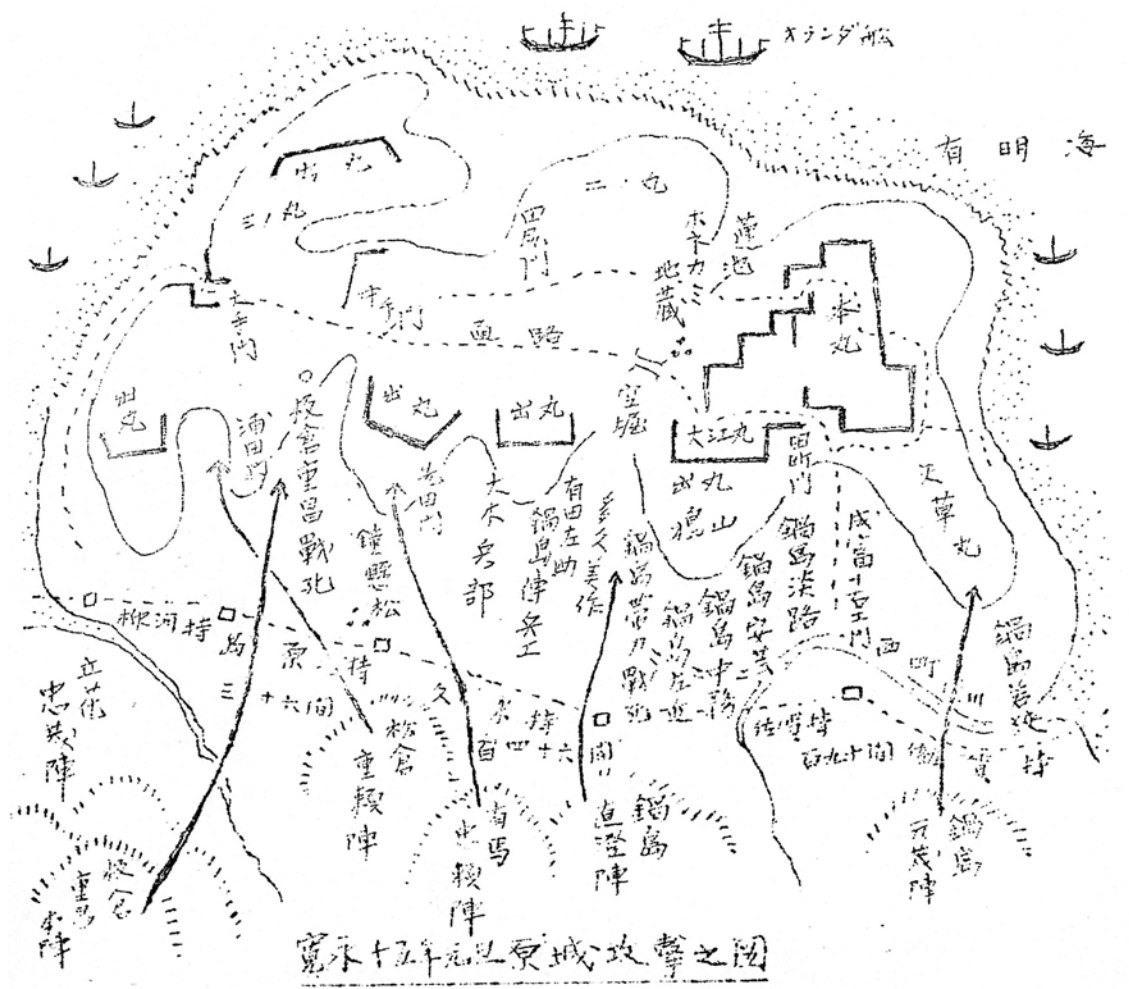
籠城の浪人中にも有馬氏の家臣であつた山田右衛門佐というものが、
筋々に信綱に内通し敵兵を城中にしのばせ、四郎時貞を討たせようと
企てたが、目的を達せず露頭して城外へ逃走した。右衛門佐は戦乱が終
つても信綱の知遇を受けず食客になつて八十歳で没した。山田右衛門佐で
し、終つたという。四郎時貞の聖像旗を捕らたのはこの山田右衛門佐で
日本最初の洋風画家である。この聖像旗は落城の時鍋島氏の家臣鍋島大
膳が方捕りしその功によつて永く鍋島家に保存してゐたが、轉々として
大沼米市の旧家魚屋町の岡山滝雄に傳つた。この聖像旗はコンスタン
チヌス大帝の十字旗、ジヤンヌダルクの旗ともいふ。此界三聖旗といは
れるもので昭和三十年頃にアメリカのロソクファエラー財団から一億八百
萬円で買取り、ローマ法王に寄進するといふ噂が立つたので南有馬
町では臨時總會を開いてこの聖像旗を原城跡に返還保存しようといふ議し
たものの買収大金はなく、政府で買取つてそれを町に譲り受けようといふ時
の石川町長、中村町會議長が下交渉のため岡山氏を訪問し、海外へ持出
すことを断念し、左にこゝに結末がまつた。こゝからうまう懸頭したといふこと
であるが、其の後どう結末がまつたのか。

一 反乱以來實に三箇月に亘り、次第に城中の食料も乏しくなり漸く歩調
が乱れ始めた。二月廿八日になつて投降者が続出したので、信綱は意を
決して最後の一着攻撃にうつり、攻防二日間、さすだの堅城もついに陥
落したつのである。落城の日、一箇壘りこして進んだ細川氏の家臣陣佐右
衛門は城中に入り半丸に馳せ、穴倉に隠れてゐた四郎時貞を榮見し、そ
の首を打落した。時貞は時に十六歳であつた。防禦軍の死傷するもの男
女二万七千余人に及び、攻撃軍も亦八千余人を出した。陣佐右衛門は之
の功によつて高千石を加増され鉄砲二十丁を恩賞として預かつた。

時貞の母や姉妹は捕虜となつて三月三日土巳の節句に斬首の極刑に處
せられ、その生首は長崎江戸町出島(徳川時代の鎖國政策によるオランダ人のみに居住
せしめて貿易せしめた所)に送られて南蠻屋敷の門前にたてられて数日暴かれた。
キリシタン宗の信者たちはこゝをみて心膽を寒むらしめたことである。
う。島原の領主松倉長門守勝家(幼名は重治)は非政の廢で七月十九日死を
賜り、肥前の領主寺沢忠高もその責任を尚ほはれたが、この戦に善戦した
功によつて壬草の四方石を削られたのみで許され、戦后のあと始末は終
つたのである。因に忠高の子の右高の娘は越前城主中川正安の室になつて
いる。

この重昌にツいて特記すべきことは清山神社(東嶺神社森參照)に保存の古
文書に、寛永十四年十二月晦日付にて幕府の老中堀田正盛以下四名の名
前で、島原の陣中、重昌に宛てた書翰がある。文意は、いままで何故か重
昌から戦況の報告がなくその状況が判らなないので催促したものである。
重昌が反徒に攻撃を始めてから戦果がどうなつてゐるのか、無能的言辭
を連ねてゐる。重昌はその翌十五年元旦の午前四時頃に出陣するに当り
右の總筆をしたためて戦場の露と消えたのである。
こその(五年)あらためたために(新しき年)には急ぼしの緒をしめ、けふはひきかへ
て甲の緒をしめ出陣仕候、誠にうつりかはれる世のあらう、今更のや

うに存候、はやうつたち申候。
 あらたまの、年に任せてさく花の
 存のみの此れば、さきかすとしれ
 とうの正月朔日ころの刻、板倉内膳



重昌の出陣は、徒らに此の日に
 送り多くの將兵を失ひ、戦に判
 だなかつたことを深く恥じ、苛
 責の念に堪えかねて、すでに死
 を覚悟して出陣したことが、こ
 の碑にあらはれてゐる。

史蹟
 板倉内膳と重昌の碑

戦死の場所にある。「以九国兵攻四郎、
 勢如破竹孰能当、鐘懸松老山河改
 一片残碑立夕陽」
 鐘懸松
 鍋島直澄の陣から東へ下った所に
 ある。鍋島
 軍が年鐘を予して陣鐘に決した。記念の松は
 枯死のままの松は三代目という。

ホネカミ地蔵
 戦後戦場に散乱する敵味方の首級を集
 めてこれを花弁り、明和三年七月十五日に記念
 の地蔵を建てて祭つたのである。

○ 正月元日重昌討死に關して (高泉の仙顛末記による)

この日は晴天であつた。午立明四時より西北の風が烈しく起り、砂塵を巻きあげ、目もあけられな
 難であつた。山崎の攻圍軍の決定では午前八時に大矢と打合、煙火を三つあげて總攻撃開始の合図といふ打合
 せになつて、外有馬忠頼が抜けかけの南名を掲げんもつ、夜も明けやらぬ午前四時頃、軍旗で戦火を閉じた
 のである。これに對して城内の信徒勢は重昌の討死の報を聞いて信仰上日月を祀ふ習慣を棄てて氣を鎮めるこ
 とから、この日の總攻撃の事前には探知し、嚴重な防備を敷いた。諸將配置の満全を期したのである。天草四郎
 時貞の不知によつて七手門警備の松右五門等二十人、出丸に加勢せしめ、計五千人を走々要所に配した。当初
 の歩調は、攻圍軍に又り立花忠茂の命令に比し、出丸に肯じない、事態が起つた。立花忠茂は唯大手門
 の海辺に駐して戒聲を掲げざるのみで再度出陣を極力促し、諸將が力を添せてゐるので、落城は確かである。我
 勢はここに於て信徒勢の道老に備へる。と主張して、動こうとしない。これは前回戦の時に立花勢が独
 りを奮戦し、有馬勢が傍觀してゐるのを、その意趣返しに出たものであつた。

板倉勢は信徒勢の強烈な反抗に堪えかねて進撃を拒まれ、有馬勢は午立明六時頃には早くも損害を受
 け、攻撃を断ち、後退の態勢にあり、繞つて鍋島勢が攻勢力が減退し、午前八時には既に大勢は
 不利になつた。板倉重昌はこの戦源を監視してゐたが、武士の面目にかけ、も実撃を敢行せんと手勢
 を従へ、自ら馬上に唐麻鎧の長柄を引提げ、城壁を牽り、城を奪進した。悲壯。この時城内から射撃
 の名手といはれる下針人主作のために、七十金同走きの二丸口から狙撃手を忍び、胸部を打たれたのである。
 金作は八十金銀を放つて急ぐ射したといふ。(下針金作は百金銀、十歩をきに針をきりて命中させたとい
 うので「懸針」の異名をもつ名手であつたといふ)。

落書に 胸板を打ち透され板倉や すなはちそこで人命内膳。板倉を打たせて守る肥前
 衆 あまり心の佐賀(差)なかりケリ。入並に寄せては冬留米の此武者、命ばかりは有馬殿かた。

御土出身 取締役社長 野崎秀雄
株式会社 野崎材木店
 岡山市下西川町八九

飲食物式
よしや旅館
 山陽線庭瀬駅前 電話三一九番

(おわり) 此の項未完